

## ぶどう畑に「田園」が流れる

余市の丘に広がるのどかで美しい果樹園に、農家と音楽家という2つの顔を持つ牧野さんを訪ねました。

北海道農民管弦楽団  
代表 牧野 時夫さん（余市町）



余市の美しい谷間にある牧野さんの果樹園「えこふあーむ」。



2011年1月末、江別市民会館で、北海道農民管弦楽団、通称農民オケの演奏会が開かれました。演目はモーツァルトの「魔笛」、ドヴォルザークの交響曲第8番など。指揮棒を振っていたのが牧野さんです。

### 理想の農業を追って

牧野さんは大阪生まれ、山梨県育ち。北海道大学農学部に進

み、修士課程まで6年間にわたって果樹栽培を学びました。同時に、4歳のころから親しんでいたバイオリンやピアノの腕を活かし、北大オーケストラに参加していました。そんな中、宮沢賢治の「農民芸術概論」のように、働くだけでなく芸術を楽しむ農業に共感するようになり、北海道で果樹を栽培しながら、賢治が実現できなかった農民オーケストラを作りたいという思いを、強くしました。

「卒業後は、まずワイン会社に就職し、そこでぶどうの知識を深めながら、就農の準備を進めました。30歳のとき、離農する方の果樹園を譲り受け、まずは農民になれたわけです」

そして2年後、有機栽培の学習会で、以前農民オケ構想を語った2人の人物と再会。夢がぐんと近づくことになりました。

「北海道は農閑期が長いので、音楽をやりやすいよね」という話になり、さっそくオケのメン

の野菜も。

「品種を数えると100種類以上。品種によって手入れや収穫の時期がバラバラですが、順番に販売していけばいいので、むしろラクかもしれない」

現実的な糧を得る農業、そして心の糧を得る音楽、そのどちらも同じように大切なのでしょう。果樹園にいる牧野さんも、演奏会とはまた違ういきいきとした表情を見せていました。



江別市民会館で開かれた第17回定期演奏会。

### 農村の近くで演奏会を

95年でした。ちなみに牧野さん一家4人は、全員バイオリニスト。最初の頃はお子さんもメンバーの一員だったそうです。

それ以来、農閑期にぎゅっと凝縮した活動を続けています。10月末から練習を十数回重ね、1月末か2月初旬に定期演奏会を開催するというサイクルが、農民オケの特徴です。

「メンバーは、10代から75歳まで、全道から集まっています。だから演奏会も全道各地で。それに農家の近くに行ったりの方が、農業関係の人たちにも聴いてもらいやすいですからね」

冒頭の江別市民会館は、第17回の定期演奏会、サブタイトルに「デンマーク演奏旅行 国内プレ公演」とありました。酪農学園大学などの協力により、初めての海外演奏旅行が決まっていたのです。2月中旬、総勢60名はデンマークに旅立ち、シ

バーを集めよう！と盛り上がりつつあったんです」

メンバー募集を開始しましたが、「ペーターベンの田園を演奏すると決めていたので、フルオーケストラ、60名必要です。でも農家だけでは3分の1程度。それで農業試験場の研究者や農協関係者、農業関係の学生も、ある意味農民だということにして…」と笑います。

メンバーがそろい、札幌で最初の演奏会を開いたのは19



熱がこもる前夜のリハーサル。